母子と家族の健康に関わる現象の理解と誰もが成長できる生涯を通じたWell-beingの実現

関連するSDGsの国際目標

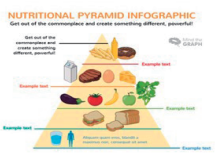
人間看護学部　人間看護学科　講師　樋口　優子
研究分野：生涯発達看護学、生命・健康・医療情報学、教育社会学

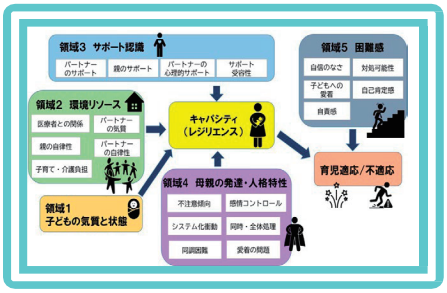
概要：誕生前（胎児期）から生涯に渡る女性とお子さんを中心としたご家族の健康に関わる研究に取り組んでいます。個々人のあらゆる状況・情報を可視化し、その現象の理解、そして対応策について根拠・論理立て、説明可能な提言ができるよう様々なデータを活用し取り組んでいます。また、医療専門職の人材育成の観点から、教育学・心理学に関する研究にも取り組んでいます。

■ 子育ての現状の可視化

PHR（Personal Health Record）である医療情報に、 PLR（Personal Life Record）である栄養、身体活動、睡眠、認知特性、パートナーの認識等様々な日常生活で発生する個人データと生活環境データを加え、包括的に現代の子育ての現状を明らかにすることに取り組んでいます。







■ 子どもと保護者の健康支援プロジェクト

小学校地区単位での子どもを対象に健診を行い、市町村が保持する乳幼児健診、学校健診、および個人が保持する母子健康手帳データの一体的な分析を行い、親子の健康増進に関するエビデンスを創出するための研究に取り組んでいます。



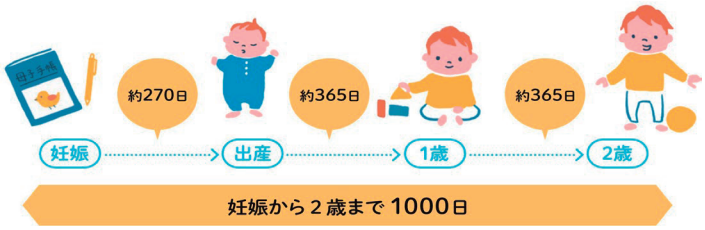








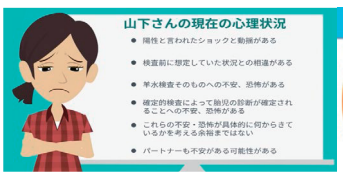
妊娠した日から赤ちゃんの２歳のお誕生日までの日数は約1000日間。
この期間の妊産婦さんを見守る研究をしています。

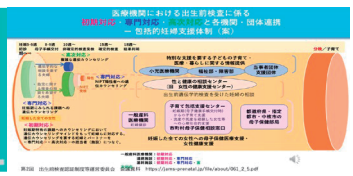




■ 出生前診断に関わる保健医療体制充実に向けた教育支援コンテンツの作成

産科医療施設で妊婦健診を担当する看護職は、出生前診断を経験する女性と関わる機会が多くあります。しかし、専門基礎教育において、遺伝学やカウンセリング技法等の専門的な教育は一般化されていません。出生前診断を考慮するカップルの理解の向上、切れ目ない支援に向けた多職種連携の一助となる教育コンテンツ作成に関わりました。





■ 教育における対応困難な事象の現状と支援システム構築の検討

看護学教育において実習指導は不可欠であり、教育者は学生との密な指導を多く経験します。対応困難の原因は多岐にわたり多くの課題が挙げられます。この現象は看護学に限らず多学問・社会で共通して起こり得ていることが予測されます。教育における対応困難の現象の解明と解決策に向けた模索を教育学、心理学の専門家とともに学際的に行います。

